

原著論文

1998長野冬季オリンピック開会式に見る文化性¹

—ローカリズムからグローバリズムへ—

舩 本 直 文 (東京都立大学)²

Abstract

The purpose of this study is to interpret what kinds of messages were tried to transmit world wide in the Opening Ceremony of 1998 Nagano Winter Olympic Games on television. I referred to the intentions of the producers of the Opening Ceremony, the ideal of the Organizing Committee, and the aims of the Ceremony according to the Olympic Charter for this interpretation.

The Opening Ceremony in Nagano was planned as festival, spectacle, and ritual performance. The programs were as follows: The ringing bell at Zenkoji Temple to banish earthly desires and purify the soul; The raising of eight log pillars known as Onbashira to form four gates and to consecrate the Olympic Stadium into a sacred arena; The Dohyo-iri Ceremony, the ring-entering ceremony by sumo wrestlers, which reached its climax when the yokozuna grand champion wrestler Akebono entered the dohyo to purify the ground for the athletes; The Nagano Games peace appeal song, which conveyed a message of hope for global peace, sung by schoolchildren dressed as Yukinko (snow children); The parade of athletes preceded by Sumo wrestlers and schoolchildren; The opening ritual according to the protocol decided by the IOC; The global chorus performance of Beethoven's Ode to Joy led by conductor Ozawa linking five cities on five continents with Nagano. By analyzing what kinds of cultural messages these programs had, it is possible to clarify the real aims of the Opening Ceremony.

It can not only be said that the Japanese national culture based on the Nagano local culture was transmitted to the global level, but also that the trans-national culture through the internationalism of the opening ritual ceremony is represented by the global symphony of Ode to Joy. It can also be interpreted that the localism was expressed as the globalism. It is questionable, however, whether these global messages were understood through the world, and whether these were well matched with the educational ideal of Olympism.

¹ Cultural aspects of the opening ceremony of 1998 Nagano Winter Olympic Games: From localism to globalism

² Naofumi MASUMOTO, Department of Kinesiology, Tokyo Metropolitan University, 1-1, Minami-Ohsawa, Hachioji, Tokyo 192-0397

Key Words : Olympism, nationalism, internationalism, trans-nationalism

キーワード：オリimpiズム，ナショナリズム，インターナショナリズム，トランスナショナルリズム

1. 緒 言

1998年2月に長野で開催された第18回冬季オリンピック競技大会には72の国・地域から3,500人の選手・役員が参加した。その初日の開会式では、ORTO '98という国際ラジオ・テレビ制作機構が世界共通のテレビ画像を作成し、122カ国30億人の人々に開会式の様子を伝えた¹⁾。ビデオリサーチ調べによると、日本での開会式のテレビ視聴率はNHK衛星放送テレビで35.8%（関東地区）に上った。これは過去の冬季五輪開会式の視聴率の記録である1972年札幌冬季五輪の24.8%を大幅に塗り替えた²⁾。この開会式では浅利慶太を総合プロデューサーとして演出を計画し、小沢征爾や萩元晴彦ら400人のスタッフが3年間かけて事前の準備と稽古に当たったとされる³⁾。彼らが世界に向けて発信しようとしたオリンピック開会式のメッセージはどのようなものであったのであろうか？ またそれはうまく伝わったのであろうか？ このようなメディアを介したスポーツ観やスポーツイメージの流布の問題については、あまり研究されていないのが実状である⁴⁾。一般的な意見ではあるが、日本に限らず世界中からこの開会式に対して、賛否両論の様々な意見が公にされている。これらはテレビというマス・メディアを通して理解されたオリンピック像の一つであるといえる。

本研究では、この開会式で一体どのようなメッセージがテレビを通じて世界に発信されようとしたのかを、テレビ画像を資料として解釈することを目的とした。考察の資料として、映像資料としてNHK衛星放送VTR画像（録画）、文字資料として新聞、雑誌、長野五輪公式ホームページ、インターネット上のCNNSIおよび日本の五輪関連のチャット、インターネット上

での学会リスト論議の内容を用いた。それらを解釈する際には、IOCの五輪憲章、長野五輪の大会理念、開会式の演出サイドの意図という理念的な背景を参照することにした。

2. 開会式の文化性解釈の方法

オリンピックの競技そのものではなく、ここでは開会式という文化的・儀礼的パフォーマンスを主たる解釈の的とする。その理由として、視聴率の高さから見て多くの人々の目に触れたものであること、平和の祭典としての五輪のスタートとして共通の関心と呼びやすいものであることが挙げられる。解釈の際には、スポーツ解釈学の定式、つまり「スポーツ実践者の行為によって描かれたプレイテキストをコンテキストに応じメタ・テキストに配慮しながら解釈すること」という定式における、テキスト、コンテキスト、メタ・テキストという多層的準拠枠に応じて開会式の諸プログラムを解釈することとした。その関係をまとめると図1のように示すことができる⁵⁾。

開会式の各プログラムはパフォーマンスとしてテキスト化できるがそれは時代的・文化的コンテキストに規定されている。さらにそのテキスト・コンテキストは認識や行動の枠組みとなるメタ・テキストによってもその意味を規定されることになる。そのメタ・テキストは一般的なスポーツ認識型枠、制作者の認識型枠、観賞者の認識型枠に大別される。この認識の型枠は開会式のプログラム解釈のフレームワークとして機能するといえる。

このような解釈のフレームワークとして、この他にMacAloon⁶⁾の多肢的ジャンル論からみたフレームワークというものが示唆に富む。MacAloonはオリンピックというパフォーマンスは次の5つの型枠とメタ・メッセージによ

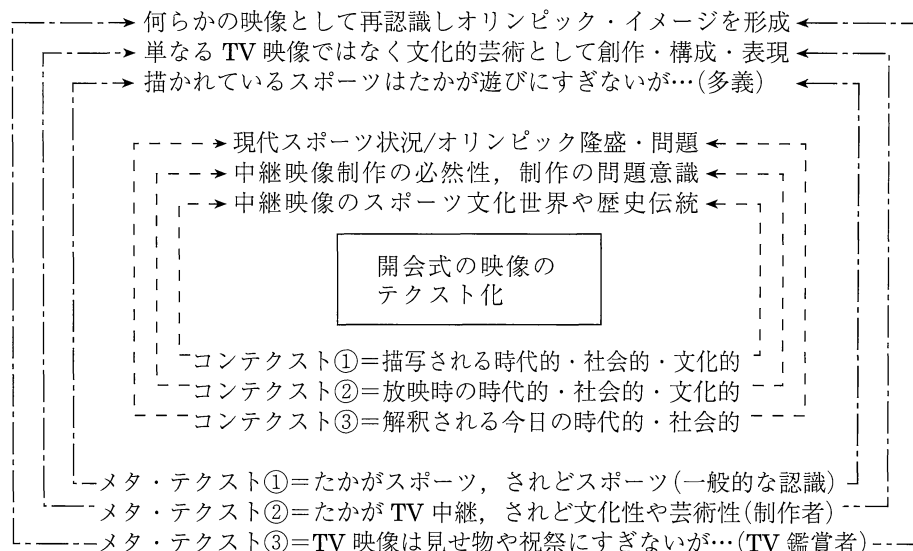


図1 開会式生映像の解釈フレーム・ワーク

って認識されるとした。(1)スペクタクル=見せ物：この型枠内の全陳述は大言壮語、聞き惚れるのも結構だが要注意、(2)フェスティバル=祝祭：この型枠内の全陳述は歓喜と幸福の糧である、(3)リチュアル=儀式：この型枠内の全陳述は真であり、もっとも大切に真面目な話である、(5)ゲーム：この型枠内の全陳述は偽である、(6)真実：違っているのは我々同じだから互いに尊敬する、という6つである。これらは開会式諸プログラムの型枠のメタ・テキストとして活用できる。特に図1における一般的な認識枠の代わりとして有用である。

ところで、佐伯⁷⁾はメディア・スポーツのメッセージは次のようなイデオロギー性を持つと主張する。「…メディア・スポーツのメッセージは視聴読者の好みと期待に情緒的に答えながら最も無難な価値を流布するイデオロギー性を持つ。それは流行に乗りながら保守的な価値の遵守を勧めるメッセージなのだ」(p. 937)と。そして流布されるイデオロギーは次のようなものであるという。(1)競技に内在する正義、法、義務、権威等を基盤にして、紛争処理のモデルを提示し、英雄と悪漢の役割配分を行い、罰を

公開し、社会秩序の維持と統制イデオロギーを流布する。(2)性役割の固定化、人種や民族イメージのステレオタイプ化、そして個人主義的業績の強調と私的生活主義のライフスタイルを楽しむの内容とすることによって、消費社会における消費文化のイデオロギーを流布する。さらに、(3)競技の秩序をコアにしながら国際的なイベントのメディア化において、ナショナリズムのイデオロギーを流布するのである。確かに、このようなヘゲモニー性をメディア・スポーツは持ち合わせている面が多いことは事実である。しかしながら、オリンピック大会の度に自国の選手を応援するというようなナショナリズムの保守的な価値の流布だけが、オリンピック大会の持つメッセージ性ではないともいえる。つまり、オリンピック大会のようなスペクタクルにおいても、ナショナルなイデオロギーだけではなく、トランスナショナルなイデオロギーをグローバルなレベルで発信し理解させることができるのではないかと、という疑問である。本研究では、スポーツ競技ではなく開会式という露出度の高い演出に着目してこのようなグローバル리즘を含めて開会式の文化性を解釈するこ

とにする。

3. 用語の規定

3.1 文化性とは

ここで言う文化性とは、文化人類学でいう「文化複合」という概念における社会文化側面、技術（物質）文化側面、精神文化側面の各側面をさすものである。本研究では、精神的・価値的な文化性を中心に考察することにする。なぜならば、文化複合の3側面の相互関連性に文化性があることも事実であるが、個別文化を寄せ集めた開会式の各プログラムについては、その制度性や技術的側面よりも価値観や象徴性などの精神文化側面の内容こそが世界に向けて発信されたメッセージ性として重要であると考えられるからである。

3.2 グローバリズムとは

ショ⁸⁾によればグローバリズムとは単一の概念ではなく次のような多様な状況にあるとされる。「…グローバル社会は近代的生産、市場、コミュニケーション、文化的政治的近代化の統合力がグローバル、リージョナル（地域）、ナショナル、ローカル（地方）といった多様な区分や差異と相互作用する多様性を持つ社会領域だと理解するのが最も適切である。グローバル社会は単一の社会システムとしてではなく、その中に様々なシステム—あるものは純粋にグローバルであり、あるものはグローバル化の端緒にある、さらにまだナショナルあるいはローカルな文脈の中に縛られているものもある—が存在する社会関係の場として理解されるべきである」（pp. 25-26）。一方、MaGuire⁹⁾はスポーツ文化のグローバリゼーションを次の5つのような段階的なものとして考えている。その5段階とは、人の交通、技術の流通、資本の流れ、メディアの流通、イデオロギーの支配という段階として展開される。さらに、彼はスポーツ文化のグローバル化は、先ずグローバルな流れを創りコントロールする組織化の出現と、次

いで、この流れに反して自己のオリジナルな文化生産を再流通されるグループ（エスニック・スポーツなど）の共存という事態を特徴とするという。このようにグローバリゼーションとはスポーツ文化の一様化・単色化ということではない。つまり、スポーツ文化に限らずグローバルな展開とは、人、物、金（資本）、技術、情報、エネルギー、軍隊、文化・思想（イデオロギー）などが地球規模で展開されることであり、その段階には多様性があるということである。スポーツ文化の展開も当然これに習うものである。

4. 開会式プログラムの解釈

4.1 開会式のテキスト・コンテキストとグローバル化の段階

開会式は様々な行動の型枠で演出されたといえる。MacAloon 流に言えば、開会式プログラムは「祝祭」と「見せ物」および「儀式」という型枠が取り混ぜられたものであったといえよう。それら各プログラムのテキスト・コンテキスト・フレームワーク・象徴的意味とそのローカリズムからグローバリズムへのスパンを読み解いていくことが本研究の主眼である。

開会式を大きく区分するならば、1998年の長野五輪の開会式のプログラムは善光寺の鐘から始まり、諏訪地方の建御柱の宗教的儀式によって四方に入場門を形成し、幕内力士や横綱曙の土俵入りによって場の魑魅魍魎を退散させ、子ども達のピース・アピール・ソングによって世界平和や未来への希望というメッセージを発信した。さらに選手入場以後はオリンピック憲章に則った開会儀式が執り行われ、最後に小澤征爾指揮による全地球的規模の大合唱「歓喜の歌」によって世界との連帯というメッセージが主張された。これらのプログラム構成内容のそれぞれが、どのような文化性を担っているのかを確認することによって、開会式の真のねらいを明らかにすることができる。

また、総合プロデューサーである浅利慶太ら

の意図を参照することは、何が一体発信されようとしたかを確認する上で重要である。小沢征爾（ボストン・フィルハーモニー指揮者）、萩元晴彦（テレビプロデューサー）を含め、浅利ら60歳代の3人がIOCの秘密主義、商業主義、権威主義に抵抗して、選手主体、プログラム公開による市民参加の促進を試みたが、IOCの秘密・商業・権威主義を崩せなかったとされる¹⁰⁾¹¹⁾。つまり、浅利慶太らは開会式の詳細

を事前にテレビなどのメディア界に発表して、参加者全員に開かれた参加型の開会式を挙行しようとしたが、IOCの秘密主義—テレビ報道で初めて一般視聴者の眼に触れさせることによって感動を生むという商業主義—によって、その斬新な試みは挫折した。開会式プログラムの事前公開はIOCによって禁止されてしまったのである。浅利らが目指した開会式のテーマは、①平和への祈り、②世界との連帯、③日本

表1 長野五輪開会式プログラムのテキスト・コンテキスト化と文化メッセージ性

プログラム	善光寺	—	建御柱	—	相撲力士	—	天皇着席	—	曙土俵入り	—	道祖神	—	雪ん子	—
テキスト	開会合図 昼		浄化 ゲート化		身体文化		象徴権力		場の鎮め 魑魅魍魎		旅の安全		雪国 純粹・素朴	
コンテキスト	地方文化 アジア2回目 TVマナー		地方文化		日本文化		日本文化		日本文化 文化融合		日本文化		日本文化	
フレーム	儀式		儀式		見せ物 祝祭		儀式		儀式 見せ物		儀式		見せ物	
象徴的意味 ローカル/ グローバル	平和の祈り ローカル		聖性 ローカル		日本のプロ ナショナル		権力 ナショナル/イン ターナショナル		異能 ナショナル/イン ターナショナル		民間宗教 ローカル/ ナショナル		純・未来 ローカル/ ナショナル	
国旗色の子ども達—平和アピール・ソング—選手入場—開会儀式—聖火リレー—														
テキスト	国際親善 一校一国運動		明日こそ子ども達へ when the children rule the world				力士先導 子ども BGM		国歌 笙・箏				Chris Moon氏	
コンテキスト	国際性		国際性 共同制作				国際性 東西融合		日本文化 日本古来文化		平和宣言 地雷廃絶運動			
フレーム	見せ物		見せ物 祝祭				見せ物 祝祭		儀式 見せ物		儀式			
象徴的意味 ローカル/ グローバル	純・未来 インタナショナル		平和・未来 インタナショナル/ グローバル				友好・参加 ナショナル/ インタナショナル		栄誉 ナショナル/インタ ナショナル/グロー		平和 グローバル			
聖火台点火—宣誓—放鳩—5大陸地球シンフォニー「歓喜の歌」														
テキスト	篝火・能・ 蝶々夫人 伊藤みどり 女王卑弥呼		荻原健司		風船鳩		小澤征爾・5大陸の同時合唱 ドリーム・チーム・「歓喜の歌」							
コンテキスト	日本文化 IOC守秘主義		競技か 役割か		環境配慮 滑降問題		衛星・ハイテク調整技術（タイムラグ調整） 東西融合（小澤とベートベン） 南ア混声合唱・ブランデンブルグ門・北京・ 国連本部・シドニー							
フレーム	儀式 見せ物		儀式		儀式		見せ物 祝祭							
象徴的意味 ローカル/ グローバル	聖・東西融合 ナショナル/ インタナショナル		神聖・誠実 トランスナショナル		環境 ローカル/ナショナル/ トランスナショナル		平和・連帯・普遍 グローバル/トランスナショナル 〈実はナショナル〉							

から伝統文化のアピールであったとされる¹²⁾。表1は開会式の各プログラムのテキストをコンテキストに応じ、どのような型枠で認識し解釈できるかを示したものである。さらに、そのプログラム・テキストのもつ象徴的な意味とその意味のメッセージ性のもつローカリズムからグローバリズムまでのメッセージの拡がりの巾を示している。

開会式のプログラムにおいて、日本文化の発信というテーマはローカリズムを中心としたナショナリズムの展開として演出されたといえるが、5大陸同時の地球交響曲の合唱以外に世界との連帯というテーマはあまり発信されていない。特に、アジア地域との連帯や交流というリージョナリズム（地域主義）の思想の発信は皆無であったといえる。平和への祈りというテーマは、祈りというよりはむしろ森山良子と雪ん子らの「ピース・アピール・ソング」という形で訴えられた。この種の平和や未来、希望などのアピールはトランスナショナルなイデオロギーであるといえるが、そのような理想がこの開会式のプログラムにおいてグローバルなレベルで展開されたかどうかについて考えると、それは今一つ不十分であったといえよう。

4.2 オリンピズムとしての展開

IOCのオリンピック憲章によれば、開会式の目的は第69条第1項において「開会式および閉会式はIOCが定めたプロトコルに従って行われる。両式典はオリンピズムというヒューマニズムの原理を反映して描き出し、さらにその普及に寄与するものでなければならない。」¹³⁾と定められている。開会式プログラムは、オリンピズムというヒューマニズムの原理を表現し、その普及に寄与することが使命である。さらにその上、第3項において式典プログラムの詳細はIOCの承認を必要とすることとされている。浅利らの開会式プログラムの事前公開という試みは、このIOCの承認を得るという規定によってその実現を阻まれたという

ことになる。

ところで、開会式で表現される必要があるオリンピズムという概念については、次のように考えることができよう。オリンピズムには様々な定義とその内容が見られるが、ここでは舛本¹⁴⁾の個人主義individualism, 民族主義ethnocentrism, 国家主義nationalism, 国際主義internationalism, 超国家主義transnationalismという5つのレベル的な区分を先ず確認する必要がある。さらに田原¹⁵⁾が紹介した元IOA会長シミチェックのオリンピズム解釈から、教育的価値、平和的価値、達成的価値、倫理的価値、美的価値、宗教的価値という価値内容としての区分を参照することにする。

このようなオリンピズム観と長野五輪開会式のプログラムとの関連性が問われなければならない。長野冬季五輪大会組織委員会は「愛と参加の五輪」という標語を掲げたが、大会の基本理念は①子ども達の参加促進、②美しく豊かな自然との共存、③平和と友好の祭典の実現という3点であった。この三つの大会理念、制作サイドの開会式の三つのテーマがIOCの規定するオリンピズムの表現と普及に役立ちうるものであったかどうかをここで確認する。表1に見られるように開会式の各プログラムは、長野の地方文化を基調とした日本というナショナルな文化性が、オリンピック儀式のインターナショナルリズムを経て、さらに小沢征爾の仕掛けた地球シンフォニーによって世界的な普遍的文化（トランスナショナルリズム）まで拡大されて発信されたと考えることができる。これはローカリズム—地方の視点—からの文化性がグローバリズム—地球的規模—の文化的展開として表現されたと解釈することができる。しかしながら、長野文化の発信はローカル・アイデンティティのグローバルな次元での発信ということであって、グローバルなレベルに相応しいトランスナショナルな平和や友情、愛といった精神文化性（イデオロギー）がグローバルな次元で発信されたということに直結するものではない。

その意味では、開会式の文化プログラムは日本文化のグローバルレベルでの静かなショー（スペクタクル）であったことは事実かも知れないが、それがどこまでテレビ視聴者に理解されたかどうかについては不確かである。また、アルペンスキー滑降競技のスタート地点騒動に象徴された環境問題というインターナショナルでグローバルな問題は、この開会式では土に還りやすい風船で創られた鳩を用いたこと以外には窺えなかった。プログラム最後の自衛隊の曲技飛行という趣向はこの環境問題から見ても逆効果でさえあったといえる。

この開会式においてグローバルな文化発信は小澤征爾指揮による5大陸を結んだ地球シンフォニー「歓喜の歌」のコーラス・プログラムであったといつてよい。これは衛星放送を駆使してハイテクによってタイムラグを無くし、世界5都市と長野を結んだ同時のコーラスという歴史的な試みが実現したのである。これはまさに空間の隔絶を無化し時間感覚を変容させるグローバリズムの象徴的な仕掛けであったといえる。しかしながら、浅利らの演出を見る限り、音楽の普遍性というトランスナショナルな文化性がやはり日本人である小沢征爾というナショナル・アイデンティティによって仕掛けられたというべきであって、ここにおいてもナショナリズムの発信が浅利らの中心的意図であったことも窺い知れる。その意味では、開会式におけるこれらの理念の発信がオリンピズムという一つ教育理念の表現と流布に寄与したかどうかについては、半ば成功半ば失敗であったといつてよさそう。

5. 開会式メッセージはどのように人々に理解されたか

浅利らの意図や長野冬季五輪の組織委員会の大会理念を確認した上で、開会式の各プログラムがオリンピズムの普及に寄与したかどうかを知る方法として、一つには一般大衆の意見の事例を垣間見ることによって確認できる。それが

無作為抽出の国民的世論調査のような大がかりで正式とされる意見聴取の方法でなくとも、一つの意見傾向として利用できよう。ここでは、日本国内と北米のインターネットのチャットに示された意見を参照し、またスポーツ学研究者たちの意見傾向を参照しておく。

日本の長野五輪チャットでは開会式批判が大勢であったといつてよい。一例として、平成10年2月7日から10日の4日間で「長野オリンピック運動に一言」¹⁶⁾に寄せられた意見は67件であった。その内、浅利慶太の演出批判が12件、開会式全体への批判9件、伊藤みどりの点火演出への批判9件、子ども利用批判8件等が主たる反対意見であった。賞賛する意見は7件のみであった。ここには同一人の複数発信という重複がみられるが、日本の一般的視聴者の傾向として、開会式プログラムに対して賞賛よりも否定的な意見が多かったことが窺い知れる。しかも、演出やプログラムの内容への批判が多いのである。

アメリカではCBSが独占放送したのであるが、その放映ぶりに対してチャットで大批判が起きている。しかも、これらの批判は浅利慶太の演出に向けられたものではなく、CBSがコマーシャル中心の商業主義を貫き細切れの報道をしたことへの批判が多かったのである。特に、開会式の小澤征爾指揮の地球交響曲のプログラムの際に2回のコマーシャルが挟まれ、しかもその上に、開会式に参加しなかったMichel Kwan選手へのインタビュー録画が挿入され、地球的でハイテクを駆使した実験的なグローバリズムの試みが寸断されたことへの批判が中心的な内容である。2月7日から10日までの4日間でCNNSIのチャット¹⁷⁾へ寄せられた開会式関連の意見は117件あり、そのうち、肯定意見30件、否定的意見136件であった。ここでの肯定的意見とはCBCというカナダの放送がコマーシャルも全くなく開会式プログラムを十分堪能できたという意見22件を除けば、開会式プログラム自体はあまり賞賛はされてい

ないといえる。それ以上に CBS の放映ぶりへの批判が強いのである。コマーシャル中心主義批判33件、「歓喜の歌 Ode to Joy」が寸断されたことへの批判22件、全体的放映のひどさ24件、生放送よりもビデオテープ録画やインタビューを挟むような報道姿勢への批判19件、アナウンサー批判11件が多く見られた意見である。

一部ではあるがインターネット上で学会ディスカッションの意見も聞くことができた。スポーツ哲学、スポーツ社会学の国際ネットに長野五輪開会式でどのようなメッセージを受け取ったかを聞いたところ、7件が返信されてきた。アメリカでは CBS の「歓喜の歌」カットへの批判が3件寄せられた。カナダからは CBC でみた日本文化への懐疑も示された。例えば、土俵入りをあのような場違いな舞台で行っても真の儀式性の意味は達成されないのではないか、また一体誰のためのセレモニーなのかという問いも寄せられた。ニュージーランドからは、global village というマクルーハンの用語が実感されたこと、また時間・空間の圧縮が「歓喜の歌」のプログラムで理解できたという意見が寄せられた。オランダからは曙という存在自体がすでにインターナショナルなものであって、日本文化発信の国際性を指摘する意見が寄せられた。このように、かなりの確かな意見も寄せられたが、全体的にみて日本の儀礼に関する知識が不足しているという指摘も多かった。その意味からして、ローカリズムやナショナリズムの次元の文化発信はあまり世界で理解されなかったといってもよからう。つまり、浅利らの試みは小澤征爾の地球大合唱という演出を除いてあまり理解されなかったといえるのである。

ところで、スポーツ競技中継では競技それ自体が高質のパフォーマンス—見せ物—となりうるが、スポーツ大会の開会式放映では高質パフォーマンスが期待できないという限界がある。そのため、パフォーマンスよりも物語化（主要選手のドラマ化、ストーリー化）という脚色が

必要となる。しかしながら、そのような物語は、祝祭性をその特徴とするような開会式では意識が拡散しがちな状況になり、見る側にうまく受信されない可能性もある。その意味で、開会式の日本文化の発信という文化性は、物語化も難しく人々にうまく伝わらなかったのかもしれない。

6. 結 語

結論として、以上のような国際的な視聴者の意見から見る限り、浅利らの三つの意図であった「平和への祈り」「世界との連帯」「日本文化のアピール」というテーマはあまりうまく受信されなかったといつてよい。平和への祈りに関してはチャットには何も載っていない。世界との連帯は小澤征爾のプログラムで世界的に関心と呼んだが、それも CBS 批判にかき飛ばされた観がある。日本では小澤征爾のこのプログラムさえもほとんど評価されてもいない。日本文化の発信も世界的にはほとんど理解されていない。それはそれで、日本文化があのような陳腐な演出で理解されては困るという向きには好都合であったかも知れない。小澤征爾指揮の「歓喜の歌」の5大陸同時合唱という仕掛けは、まさに連帯、平和、協力というグローバリズムを表現する格好の材料であったが、小澤征爾のナショナリティがそれを拒む材料になったともいえなくもない。特に、開会式では平和、友情、連帯、愛、希望など、トランスナショナルなイデオロギーが表現されることこそが、オリンピックの表現と普及ということに通ずることになると思われるが、それらがグローバルな次元で理解されたとはいえないようである。日本発アジアとの連帯というリージョナリズムも発信されなかった。

オリンピックの価値内容に照らせば、平和的価値、美的価値、宗教的価値を開会式の演出では発信しようとしたことが窺える。教育的価値は一校一国運動として雪ん子たちには寄与したが、参加選手たちに対する教育的価値の達成と

いうことについては不確定である。

日本のチャットで見られるような開会式批判からして、誰が主役か、何が発信されたか、誰が見て楽しんだか、などの問題に関しては不確定な様相が窺える。そのため、トランスナショナルなイデオロギーを理解できるような能力を磨くためのメディア・リテラシー教育の必要性が今後のスポーツ教育の一つの課題であるということことも付言しておいてよからう。

(付記：本研究は1998年度日本体育学会体育原理専門分科会夏期合宿研究会(1998.7.28)および1998年日本体育・スポーツ哲学会第20回大会(1998.8.18)の発表をもとに加筆修正したものである。)

注および引用・参考文献

- 1) NHK (BS1) でのテレビ中継中のアナウンサーの解説 (1998.2.7) による。
- 2) ビデオリサーチ調べ。 <http://www.videor.co.jp/tst/vrd/98nagano.html> 参照。
- 3) 朝日新聞, 1998.2.8 (東京版朝刊)。
- 4) このような問題の重要性は、例えば佐伯によって序説的に指摘はされているが、オリンピック大会レベルでの具体的展開はいまだ見られない。佐伯聰夫 (1997)。メディア・スポーツ論序説：メディア・スポーツの構造と機能—問題の所在と分析の視点のために—。体育の科学。47: 932-937。
- 5) 舛本直文 (1998)。1998長野冬季オリンピック

開会式の文化論：精神文化側面のテキスト化に向けて。1998年度日本体育学会体育原理専門分科会夏期合宿研究会 (未刊行資料)。

- 6) MacAloon, John J. (1984). Rite, drama, festival, spectacle. ISHI: Philadelphia, p. 258. (マカルーン：光延明洋他訳 (1988)。世界を映す鏡。平凡社：東京, p. 417.)
- 7) 佐伯聰夫, 前掲書。
- 8) ショー：高屋定國・松尾 眞訳 (1997)。グローバル社会と国際政治。ミネルヴァ書房：京都, pp. 25-26. (Shaw, Martin (1994). Global society and international relations: Sociological concepts and political perspectives. Polity Press.)
- 9) MaGuire, J. (1998). Sportization and globalization: A process sociological perspective. 日本スポーツ社会学会第7回大会 (未刊行資料)。
- 10) 朝日新聞, 1997.2.7 (東京版朝刊)。
- 11) 朝日新聞, 1998.2.8 (東京版朝刊)。
- 12) NHK (総合テレビ) インタビュー (1998.2.7) より。
- 13) IOC home page version. <http://www.olympic.org> 参照。
- 14) 舛本直文 (1998)。スポーツ映像の中に見るオリンピズム：その多元的表現の解釈。体育・スポーツ哲学研究。20-1: 31-47。
- 15) 田原淳子 (1996)。オリンピズムの現代的意義—オリンピック教育の視点から。日本体育学会東京支部第6回例会 (未刊行資料)。
- 16) <http://www.geocities.co.jp/Colosseum/1349/2.html> 参照。
- 17) <http://cgi.cnni.com/cgi-bin/WebX?> 参照。

受付 1998年 9 月14日

受理 1999年 1 月14日